

高校2年生のクラスは珍しく男女比が1対1のクラスでした(文系です)。夏休み前、体育祭の応援合戦で何をするかの話し合いでは男女で意見が分かれてしまい、最終的に多数決を採ることに…そして冒頭の数字…そう、男子が一人欠席の日でしたので、女子が猛ブッシュしていたTommy february6のEVERYDAY AT THE BUS STOPに決まったのです。

曲のMVを再現すべく、クラス全員がかわいいチャリダーの衣装をまとめて踊ることになったので、男子には抵抗

あったと思います。しかし、腹をくくってミニスカートやルーズソックスも楽しみ(?)真面目に練習に励んでくれた姿は、朝日高男子魂!を感じました。



しかし、朝日高校最後の2年J組の応援合戦の内容として、これでよかったのか…今頃になって、悩むところです。

(平成15年卒 溝部(旧姓 佐藤)ちひろ)

あのころの入試問題を見てみよう! 第3弾 新聞記事に見る一世紀前の入学試験

不安に胸打ち騒ぐ八百の少年

今から1世紀前の1918年大正7年、現在の山陽新聞の前身である山陽新報に、岡山中学の入試の様子を記した記事が掲載された。現在の受験生は多くが出身中学の教諭らに引率されて志望校にやって来る。しかし当時そんなシステムは無く、受験生は両親など保護者に連れられて試験会場に現れる。受験生の年齢はだいたい12歳から14歳。親から見ればまだ幼いわが子を思う気持ちは100年前も今も変わり無いようだ。



岸の柳も緑募り春は漸く酣^{たけな}ならんとして人生の春に恵まれた花の少年少女は競うて中等学校の門に集まるこゝ縣立岡山中學校の入學試験は二十七日から二十八日に各午前八時から行はれる、

(中 略)

さて何れを見ても花の蕾の十四五才今日を晴れの登龍門を母親の心盡しに着せて貰った眞新しい裾短の小倉袴^{かすり}に飛白の筒袖姿が雄々しいけれど若い心に今日の重荷を打案じてかインキ壺や上草履^{かぶ}上げた手も打慄へて日頃の腕白振は何處へやら、それと同様に附添の父兄母姉の心遣ひは亦格別で、愈試験場^{いよいよ}に這入となると「さあ根薬だよ」と一瓶の薬を渡す子煩悩もあつた、

《現代文》

旭川の川岸の柳も緑が深まって、春もたけなわを迎えようとする今日、人生の春に恵まれた花の少年少女は競って中等学

校の門に集まった。ここ県立岡山中學校の入學試験は、27日、28日の二日間、それぞれ午前8時から行われる。

(中 略)

さて、いずれを見ても花のつぼみの14、5歳だ。(本当は尋常小学校6年生:12歳での受験となるが不合格となって再受験の生徒も多々居るため此の記述となったか)今日の試験が晴れの登龍門となるだけに、母親の心づくして着せて貰った眞新しい裾の短い小倉織の袴にかすりの筒袖。その姿は男らしく頼もしいけれども、若い心に今日の試験の重荷が重くのしかかっているのか、インクつぼや上履きを下げた手が震えている。日頃の腕白ふりはどこに行ったのだろうか。それと同様に、付き添いの保護者の心遣いはまた格別で、いよいよ試験場に入る時になると「さあ根薬(葛根湯など植物の根を煎じた薬か)だよ。」と一瓶の薬を渡す子煩悩な親御さんの姿もあった。

大正7年1918年は第一次世界大戦の好景気を受けて国民の所得が一時高くなった年だった。また、原敬内閣が鉄道網や高等教育機関の拡充を進めた時期にあたり、岡山県でも中学校や高等女学校などの中等学校設立が相次いだ。

巷では新中間層とも言うべきサラリーマン家庭が増え、高学歴が高収入につながることから進学熱が最も高まった時期でもあった。それを反映してか、此の年あたりから急に山陽新報に入試の記事が現れてくる。此の記事もそのひとつと言える。

